

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、表現を変えたところがあります。)(六十点)

中学一年生の「ぼく(来人)」には、幼なじみの「圭一郎」と「琉生」がいる。小学生の頃は、「来人」の祖父母が営む喫茶店「パオーン」でよく放課後過ごしていたが、中学生になると、「琉生」が私立中学校に進学したため、なかなか集まれないでいた。ある日、夜中に喫茶店「パオーン」のシャツターをだれかが叩くという事件が起きた。「来人」の祖父が「のっぺらぼう」の作業だったと言うので、「来人」は犯人を見極めようと、友だちと共に、夜中に店内で待ち構えた。そして深夜、入口を叩く音が聞こえた。「来人」は勢いよく飛び出し、逃げる白い影を追いかけた。店の外で「来人」の友だちが「のっぺらぼう」をつかまえた。

「どういうこと? わけわかんない! 琉生がのっぺらぼうだったってこと? なに? 一体どうなってるの? はああ? おいつ、なんとか言えよ、琉生!」

琉生は下を向いてしまったままだ。

「とりあえず、なかに入ろう」

* ジュンくんが言い、ぼくたちは店にもどることにした。頭のなかは疑問符だらけだ。どういうことだ? のっぺらぼうが琉生だったのか? 毎週シャツターを叩いたのも琉生ってことか? 意味がわからない。

店の入口から入った瞬間、さけび声が聞こえた。圭一郎だ。さけびながら、A腕をぐるぐると回している。電気をつけたら、ようやく動きを止めてしずかになった。

「え……? なに……? はあ? 琉生っ!」

圭一郎が頓狂な声を出す。

「ちよつとゆつくり話そうよ」

* ゆりちゃんが言っ、四人がけのテーブルを二つ合わせた。氷水しか用意できなかったけれど、ぼくはトレイにグラスをのせてみんなに配った。

「どういふことなのか説明して」

外にいたゆりちゃんとジュンくん、そして琉生に向かって、ぼくは言った。ジュンくんは、ふうつ、と息をはき出して、水をごくぐくと飲んだ。ゆりちゃんもそつとひとくち飲んで、それから話しはじめた。

「わたしたち、ずつと外で見張ってたの。勝手口のところは店の入口からは^aシカクになってるけど、用心してかべに背中をびたつとくっつけて待っていたの」

ジュンくんがうなずく。

「三時前に通りの向こうから、一人の男の子が歩いてきた。こんな夜中に散歩なんてって思ってたたら、パオンの前で立ち止まってキヨロキヨロしはじめたの。わたしはその時点で、琉生だつてわかった」

琉生は下を向いたままだ。小さい頃、ぼくたちはよくゆりちゃんに遊んでもらった。顔をはつきり見なくても、ゆりちゃんならすぐに琉生だつてわかるだろう。

「そうこうしているうちに、琉生は手さげから白い布を出して、ポンチョみたいに頭からすつぽりとかぶった。次に包帯みたいな布を顔に巻いていって、それからお面を取り出して顔に着けたの」

テーブルの上には、身体に着けていた白いポンチョと、白いお面、顔をおおっていた白い布が置かれている。

「三時になった瞬間、シャツターを叩きはじめた。わたしたちは少し様子を見ることにした。店のなかからシャツターの開く音がしたから、来人がシャツターを開けたんだなつてわかった。来人が外に出てきたとき、琉生は向こうのゴミ置き場にかくれてた」

ゴミ置き場は^bロジにあつて、ぼくもそこまでは見なかった。

「少ししてから、今度は自動ドアを叩きはじめた。棒みたいなものでコツコツコツつてね」
指揮棒みたいなものも、お面や布と一緒に琉生の前に置かれている。

「今度はかくれないで、そのままドアの前に立つてたわ。そして来人がドアを開けた。琉生が走り出したのを見てジュンくんが追いかけた。琉生だつてわかつていたから、ジュンくんにお手柔らかにつかまえてね、つて頼んでおいたの」

「……そうだったんだ」

息がふつうにできるようになって、ぼくは深呼吸をひとつした。

「琉生、なんとか言えよ」

琉生を見て言った。琉生が顔をあげて、ぼくと圭一郎の顔を交互に見る。

「……ごめん」

「なんで？ 理由を聞きたいよ」

琉生は眉間にしわを寄せてくちびるをかんでいる。しばしの間があった。
*権守さんにはこの状況がサツパリわからないと思うけど、なにかを感じ取ってくれたのか、しずかに座っていてくれた。

「琉生」

名前を呼んだのは、圭一郎だった。①琉生の肩がビクツとする。

「なあ、琉生。お前、元気だったのかよ。LINEの返事もよこさないから、ずっと心配してたよ」

②琉生の表情が、ふっ、とゆるんだ。圭一郎ってすげえ。この状況でのつべらぼうのことを聞かないで、琉生の心配をするなんて。空気の読めなさは、圭一郎なりのやさしさだ。

「あんまり元気じゃなかったよ、おれ」

琉生が言う。

「話してくれよ」

圭一郎がうながすと、琉生はB話しはじめた。

「新学期はじまって早々、*RKRのグループLINEに、美術の時間に作ったっていう仮面の画像を送ってくれたら？」

ぼくと圭一郎はうなずいた。美術の授業で仮面を作るという課題があって、ぼくは山姥、圭一郎はピエロを作製した。あまりにCムザン

③「なんかいいなあって思ったんだ。中学で新しい友だちはできたけど、なんていうのか、心の底からばか笑いでできなくてさ。二人が送ってくれた画像の仮面が超キモくてうらやましかった……」

「なんだそれ」

思わず声が出る。

「それで、のっぺらぼうの仮面を作ったってわけか？」

琉生は答えなかったけれど、④琉生なりの思いが、のっぺらぼうという、目や鼻や口、耳のない仮面に投影とらえされているような気がした。見るもの、聞くもの、すべてが新しい中学校生活。新しい関係と新しい自分を、一から作り上げていくのは大変なことかもしれない。

「二人がいつもパオーンでだべってるのも知ってた。いいなあって思ってた」

「何度もさそったじゃん」

「……うん、でもさ、もう話に乗れない気がしてさ」

「そんなことっ……」

C 声に出した瞬間、ぼくの脳裏のうりに、三人でここで会ったときが思い出された。あれは確か四月だった。ぼくと圭一郎は、中学でも同じクラスになれたのがうれしくて、はしゃいでいた。

担任たんにんの先生がゴリラにそっくりで、担任自ら「ゴリラ先生って呼んでもいいぞ」と言ったのがツボで、思い出してお腹なかをかかえて笑った。圭一郎がゴリラ先生の似顔絵をかいて、それがソックリなものもおかしかった。

あのとき、琉生はどんな顔をしていただろう。話し好きの琉生のことだから、なにかしゃべってくれたと思うけど、まったく覚えてなかった。琉生の中学校のことを聞いても、知らない人のことばかりでおもしろくなかった。

⑤「……ごめん」

ぼくはあやまった。

「琉生の気持ち、考えてなかったかもしれない」

「ごめん」

圭一郎も続いた。

「でも、だからって、こんな真似まねするのおかしくないか？ ぼくの家や圭一郎の家だったらまだわかるけど、なんでおじいちゃんちなん

だ？ 店でこんなことするなんて、めっちゃ迷惑めいわくたる」

ぼくの言葉に、琉生が「ごめん！」と頭を下げる。

「……ここで二人がたのしそくにしゃべっているのを見るのがいやだったんだ。通りの向こうからたまに見てた」

「なんだよ、それ。声かけて入ってくればいいじゃないか」

「……できなかったんだよ」

語尾ごびがふるえている。

「おじいちゃんとおばあちゃん、夜ねむれなくてかわいそうだったよ」

「それは本当にごめんなさい！」

琉生が頭を下げる。

「ぼくにじゃなくて、おじいちゃんとおばあちゃんにあやまってほしい」

ここだけはゆずれないと思って、強めに言った。

「琉生は気付いてほしかったんよなあ」

うしろから声が出た。

「おじいちゃん！」

おじいちゃんが二階から降りてきた。

「起こしちゃった？ うるさかったよね、ごめん」

「なーに言つとる。とつくに起きとるわい。話も全部聞かせてもらったぞなもし」

おじいちゃん手を腰こしに当てて、仁王立におうだちしている。

「おじいちゃんのパジャマ姿かわいい」

ゆりちゃんがつぶやき、まんざらでもなさそうな顔で、おじいちゃんが鼻をひくつかせる。おじいちゃんのパジャマは、コアラ柄がらだった。あらゆるポーズをしたコアラが、こつちを見て微笑ほほえんでいる。

「来人のおじいちゃん、ごめんなさいっ！」

琉生が椅子いすから下りて、D 土下座どげざをした。

「なーにやってんだあ、琉生。顔上げろ」

琉生がおじいちゃんを見て、目をごしごしとこすった。

「おら、のっぺらぼうはおめだつてわがってだよ」

「えっ！ そうだったの？」

声が裏返うらまってしまった。

「物音がした最初の一週間、おめとこの学校は休みだったべさ」

おじいちゃんの問いかけに、琉生が小さくうなづく。

「あつ、もしかして修学旅行!？」

思わず大きな声が出た。ぼくは琉生の中学の修学旅行の日程を覚えていなかったけれど、おじいちゃんは知ってたんだ。確かに、その話をしたのはここ、パオーンだった。おじいちゃんも近くにおいて、話を聞いていたのかもしれない。

「それと金曜と土曜の夜だべ。次の日に学校のない日を選んだんだべさ。夜ふかししとつたら朝起きれねえからなあ。のっぺらぼう見たときは、えらいたまげたけれども、走り去っていく姿を見て、おめだつてピンと来たべさ。じつちやをあなどつちやいけね」

おじいちゃんのなぞ解きに、権守さんがうなる。

「琉生はおらに気付いてほしかったんばいね。だけん、うちに来たんばいね」

ぼくは琉生を見た。琉生は、がっくりとうなだれている。

「琉生も圭一郎も、うんと小せえどぎがらよく知つてら。おらにとつては来人と同じめんこい孫だべさ。琉生だつてそうだべ？ おらのこと、本当のじつちやだと思つてただべな？ おめんとこは、年寄りと一緒に住んでねえしよう。琉生は、じつちやに気付いてほすかつんだべなあ。じつちやだつたら、大ごとにするって思つてだんだよなあ」

妙な方言を使って、おじいちゃんが朗々ろうろうと語る。琉生がなんの反応もしないところを見ると、dズボシずぼしなのだろう。⑥あまのじゃく

な琉生らしい。素直すなおじゃないくせに、さびしがり屋。目立つのが好きだから注目されないと、一気に不機嫌ふきげんになる。

「おら、おめが夜中に出歩いちよるのが心配でならなかっただよ。中学あがったつつつても、まだまだこんまい子どもだべ。つかまえちやるか迷ったけど、全部あきらかにすつのは、じっちゃでなく、来人や圭一郎のほうがいいだべさと思ってよう。正体わがってからは、二階またの窓からおめのことこっそり見てただよ。おめがかぶりもん取って、家さげえるとき、心配だもんでずつと目で追ってたさあ。ほんとはうしろからついて行きたかったけども、足が悪いでなあ、悪かったなあ」

⑦ 琉生が今にも泣きそうな顔をしている。おじいちゃん、琉生のことが心配で、ずっと二階の窓から見てたんだ。

「今回のことは大目に見てやるばい。その代わり、一週間パオーンを手伝えや」

おじいちゃんの提案に、琉生は涙なみだをぬぐって素直にうなずいた。

(椰月美智子『純喫茶パオーン』角川春樹事務所)

*注 ジュンくん＝「ぼく」の友だちである「ゆりちゃん」の恋人。「ゆりちゃん」と同じ大学に通っている。

ゆりちゃん＝「ぼく」の家の近くに住む大学一年生で、小さいころから「ぼく」たちの面倒めんどうを見てくれていた。

権守このかみさん＝「ぼく」や「圭一郎」の同級生で、同じ部活(科学部)に所属している。

RKRのグループLINE＝「琉生」と「圭一郎」と「ぼく」でいつでも話せるように作ったネット上でのグループ。三人の名前の頭文字から名付けた。

四月半ば以降いこうから「琉生」がトークに参加しなくなり、その後いつの間にか退会していた。

問一 a d のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 A D に入る言葉として適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ言葉を二度以上使ってははいけません。

ア とつさに イ いきなり ウ やみくもに エ すぐに オ ゆっくりと

問三 ——線部①から——線部②における「琉生」の気持ちの変化を説明しなさい。

問四 ——線部③とありますが、どういうことを「いいなあ」と思ったのですか。それを説明したものととして最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「琉生」は、新しい環境での友人関係に悩み、「ぼく」と「圭一郎」の送った画像を見て、悩んでいなかった小学校の頃の明るく楽しい学校生活をなつかしみ、二人が通う公立中学校をうらやましく思ったということ。

イ 「琉生」は、新しい環境でできた友人たちとは、心のどこかに距離があるのを感じており、「ぼく」と「圭一郎」が変な仮面の画像を送りあって絵が互いに下手なのをほげまし合う様子をうらやましく思ったということ。

ウ 「琉生」は、新しい環境でできた友人と仲良くなれる気がしていたが、友人たちと自分の感覚の違いに驚き、自分と同じ笑いの感覚を持つ「ぼく」と「圭一郎」がいつも通り楽しむのをうらやましく思ったということ。

エ 「琉生」は、新しい環境での友人関係に慣れずに苦労しているときに、「ぼく」と「圭一郎」との小学生からの慣れ親しんだ人間関係を目の当たりにし、その居心地の良さを楽しむ二人をうらやましく思ったということ。

オ 「琉生」は、新しい環境での友人関係に悩み、学校生活を心から楽しめないでいたため、「ぼく」と「圭一郎」が二人だけで写真を送り合い、新生活を思いきり楽しもうとしている様子をうらやましく思ったということ。

問五 ——線部④とありますが、「琉生」のどのような「思い」が「投影」されていると「ぼく」は感じていますか。分かりやすく説明しなさい。

問六 ——線部⑤とありますが、なぜ「ぼくはあやまった」のですか。その理由を説明したものととして最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「琉生」の中学校の話がつまらなくて、「圭一郎」の話にだけ笑っていた「ぼく」の態度に「琉生」が傷ついていたことに気づき、面白くなくても話を楽しんでいるかのように見せるなどの、「琉生」に対する思いやりが足りていなかったと感じたから。

イ 「琉生」の中学校での話を聞いても「琉生」の大変さが分からなくて、「圭一郎」とくだらない話ばかりしていたが、新しい環境での苦勞を想像すると、友人として助言することもできたため、「琉生」に対する思いやりが足りていなかったと感じたから。

ウ 「琉生」の中学校の話が、「ぼく」にとっては分からない話のために、つまらなく感じたことを思い出し、やっと「琉生」が「ぼく」と「圭一郎」の話を聞いていたときの気持ちが想像できて、「琉生」に対する思いやりが足りていなかったと感じたから。

エ 「琉生」が「ぼく」たちの中学校の話を面白がってくれず、その態度にいらだって「琉生」を遊びにさそうのをためらうようになったが、そうされたときの「琉生」のとまどいを想像すると、「琉生」に対する思いやりが足りていなかったと感じたから。

オ 「琉生」の話をまったく聞かないで、「ぼく」と「圭一郎」が自分たちの中学校の話ばかりして笑っていたことを思い出し、「琉生」が自分の中学校の話も聞いてほしいと考えていたことに気づき、「琉生」に対する思いやりが足りていなかったと感じたから。

問七 —— 線部⑥とありますが、「琉生」のどういうところが「あまのじゃく」だといっているのですか、説明しなさい。

問八 —— 線部⑦とありますが、なぜ「琉生」は「泣きそうな顔をしている」のですか。理由を説明したものととして最も適切なものを、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 迷惑めいわくをかけた自分のことを気づかう「おじいちゃん」に対する申しわけなむねさで胸がいっぱいになったから。

イ 「おじいちゃん」が自分の気持ちを理解し、非を認めてあやまってくれたことで暗い気持ちが晴れたから。

ウ 「のっぺらぼう」の正体をきちんと見破っていた「おじいちゃん」のするどい観察力におどろいたから。

エ 自分がしたいはずらを、大ごとにはしないと「おじいちゃん」が約束してくれて心からほっとしたから。

オ 悪意があつて店にいたずらしたのではないと「おじいちゃん」の誤解を解くことができ安心したから。

カ 自分のかくしていたつらい気持ちに「おじいちゃん」が気付いてくれていたことが、うれしかったから。

キ 「来入」より自分のほうが大切だと思つてくれる「おじいちゃん」のやさしさで心が温かくなったから。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、表記を変えたところがあります。)(四十点)

「仏」の字は、インドの原語で「ブツダ」と言います。その意味は「気づく」ことです。「悟る」とか「目覚める」とも訳されますが、要するに気づきです。何に気づくかが問題です。大いなる気づきと、その気づきに至る道を説くのが仏教と言えるでしょう。

私が京都で*小僧をしていた中学生の頃の話です。「わしの部屋へ行って*床の間を見て来なさい」。こう言いつけられた私は、あわて雑巾を手に取り、師匠の部屋へすつ飛んで行きました。

ほこりが残っていないか、水滴を拭き忘れていないか、クモの巣がないか、壁を傷つけていないか、はたまた*香炉や花入れの向きが間違っていないか。顔を床の間に近づけて色々点検しましたが何も気になるものはありません。困り果てて戻って来た私に対し、師匠は言いました。「わしの活けたきれいな花が目に入らなかったか？」

掃除の良し悪しが問題ではなかったのです。掃除をしている私が床の花を見て気づいたかどうか。中学生の純真な心に、果たして床の間の美しい花が映ったかを聞いたのです。あえて「見なさい」と言わないで自らで気づくのを待つ。今に想えば、ちよつと意地の悪い、しかし本当の親切でした。

抹茶を*点てることも仕事のひとつでした。狭い部屋には*炉がきられ、師匠とお客さんが向かい合つて座っています。大体、人生相談や何やら真剣な話です。長い時間かかることがよくありました。お茶係の私は、お客さんがお茶を飲んでくれるのを待ち、その茶碗を片づけるためにただひたすらその場で待っています。私の放課後は過ぎていきます。無言で座っている小僧の存在を*意に介さず、その小僧が点てたお抹茶が自分の前にあることにも気づかず、おかまいなしに延々と話し込んでいました。

いよいよ話も終わり、お客さんはすっかり冷えたお茶を飲むと「あく美味しいお茶ですねえ」とおっしゃることがありました。帰りに障子を開けて外を*覧になったとたん「まあくきれいなお庭ですねえ」とおっしゃる。このように一々感嘆されたことを覚えています。門まで見送つて、その姿が見えなくなるまで深く頭を下げ続けます。片づけに戻って来た私に、師匠は言いました。「あの人は、来たときもこの庭を見ていたはずじゃ」

心に引っかけがあるときは、目を開いていても何も気づくことはありません。心が空っぽになったとたん、お茶が美味しく飲めたり、

庭が目飛び込んで美しいと感じるので。

私たちは、日常の生活での気づきをもっと大切にしたいものです。人の心に気づく。場の空気に気づく。気づく人は、どんなことでも案外よく気づきます。気づくから無駄がなくなる。無駄がなくなると物事はよい方向に転じます。

逆に、気づかない人は、どんなことにも気がつきにくいものです。自分で気づかなければ、他人から指摘されなければなりません。指摘ばかりされれば嫌になつてしまいます。特に人の命や健康を預かっている仕事なら、「気がつきませんでした」では許されないので。かと言つて、マニユアルを積み上げても、現場で気がつかなければ、後で取り返しのない結果になつてしまつてしまうでしょう。

気づく人になるためには、何をしたらよいのでしょうか。それは心を「空っぽ」にすることです。『般若心経』でも説かれている「覆うものがない」「執着するものがない」という心です。まずは抱えすぎているものを下ろしてみましよう。やり過ぎていてることをやめ、急ぎすぎているスピードをゆるめ、見えるもの、聞こえるもの、触れるものをありのままに受け入れてみましよう。きれいな鏡のように、空っぽの心で季節を感じてみましょう。

そして「下座の修行」です。今でこそ上座だ下座だとあまり言いませんが、腰を低くし下座の立場に徹して初めて気づく世界があります。現場で接して初めて気づく世界があります。師匠が残してくれた言葉を思い出してみますとヒントがありました。「高い所にいるとよく全体が見渡せる。しかし、低い所へ下りて直に接することを忘れてはいけない」。言うことは簡単ですが、行うことは難しい。あれから時間だけは経ちました。師を想えば、なかなか*慙愧に堪えません。

(飯塚大幸「気づく」『ベスト・エッセイ2020』光村図書出版)

*注 小僧||仏門に入つて、僧になる修行をしている子ども。 床の間||畳の部屋の床を一段高くした所。花や置物、掛け物をかざる。

香炉||香をたくときに使う器。 点てる||抹茶に湯をそいでかきませ、飲み物としての抹茶を作る。

炉をきる||床の一部を四角に切つて枠で囲み、中に灰を入れて火を燃やす所を作る。 意に介さず||気にしない。気にかけない。

慙愧に堪えない||自分の行いを反省して、心からはずかしく思う。

問一 筆者は、「気づく」ことができるようになるには、どのようなことが大切だと言っていますか。百字程度で答えなさい。

問二 本文をふまえて、あなたが普段ふだんの生活の中で改めて気づいた経験を示し、そこから考えたことを二百字程度で書きなさい。